

2 研究の実際 > (2) 授業の実際

カ 検証結果<高等学校>

【検証の視点 I】

生徒が持つ「強み」に着目した交流活動が自己肯定感の高まりにつながったか。

【検証の視点 I - A : 「自分自身に関する自己肯定感」に関する項目】

オ 検証内容と検証方法 について

↑こちらをクリックすると、検証内容と検証方法を見ることができます。

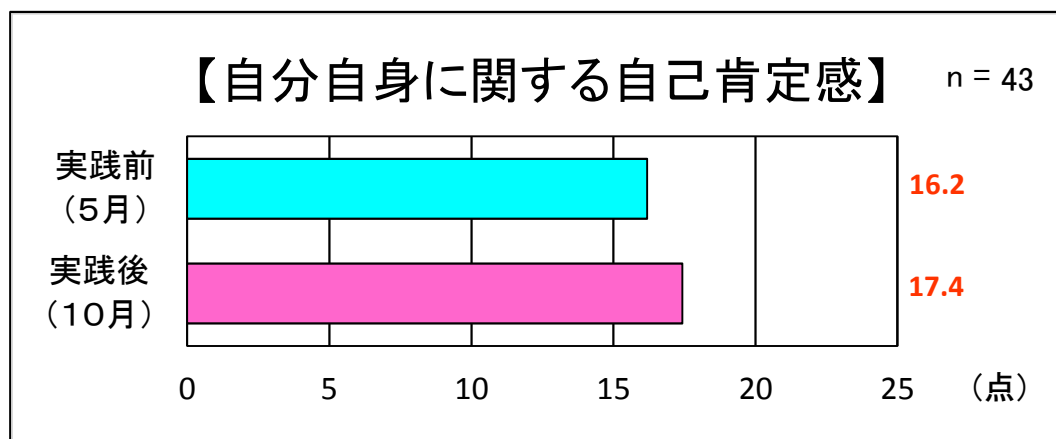


図1 生徒の「自分自身に関する自己肯定感」に関する意識と行動の変化 (全体)

○授業実践の前後で、全体では数値が 1.2 ポイント上がりました (図 1)。項目別でも全体的に数値が上がっており、特に、「自分の長所も短所もよく分かっている」で 0.4、「自分には良いところがある」で 0.3 ポイント上がりました (図 2)。また、生徒の振り返りシートには、「自分は短所もあるけど長所もあるから、もう少し自分に自信を持っても大丈夫だと思えた」「自分は特に『強み』も長所とかもそんなにないと思っていたが、今日、友達から自分の『強み』を教えてもらって、自分にもちゃんと『強み』があるんだなと思った」「自分の特技や好きなこと、嫌いなことを書き出すことで、意外と苦手だと思っていたことも見方を変えれば『強み』に変わりそうなものが多くて良かったと思う。自分のことをもっと知っていきなと思った」という記述が多く見られました。これらのことから、生徒が持つ「強み」に着目した交流活動を通して、生徒が「強み」への理解を深めながら自分の「強み」を知ったことにより、「自分自身に関する自己肯定感」を高めることができたと考えます。

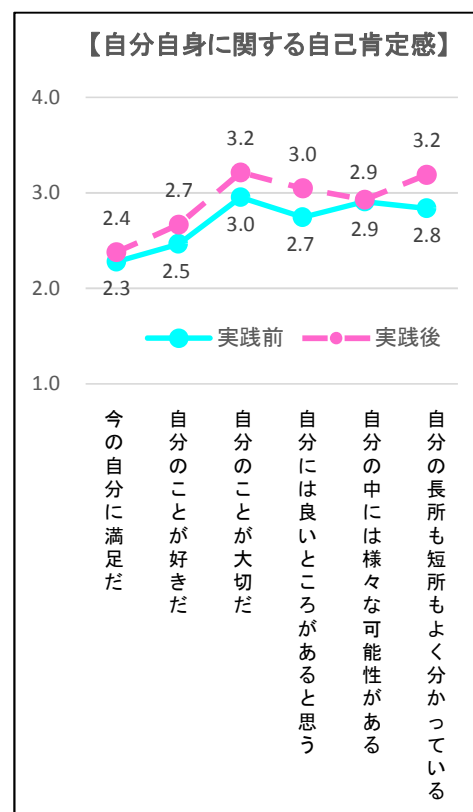


図2 生徒の「自分自身に関する自己肯定感」に関する意識と行動の変化 (項目別)

【検証の視点 I - B : 「友達との関係を通じた自己肯定感」に関する項目】

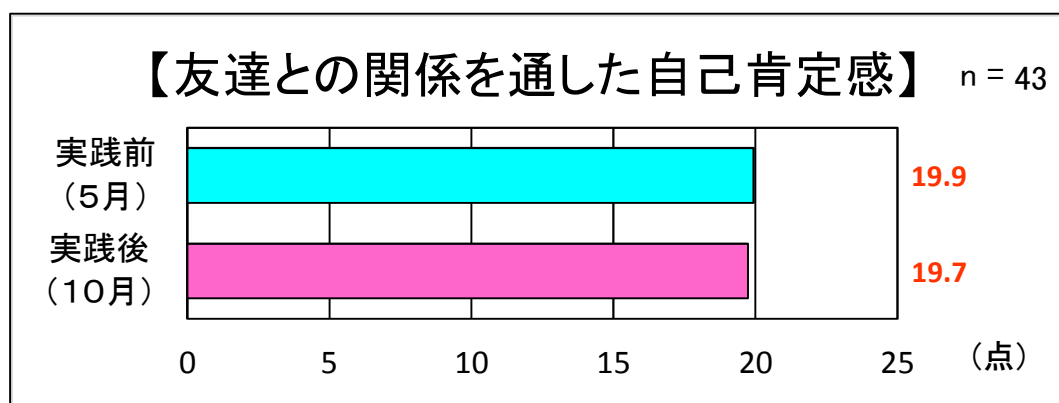


図3 生徒の「友達との関係を通じた自己肯定感」に関する意識と行動の変化 (全体)

○授業実践の前後で、全体では数値が 0.2 ポイント下がりました (図3)。項目別では、数値に大きな変化は見られませんでした (図4)。しかし、生徒の振り返りシートには、「今までは、自分の良いところや自信のあることはこれですと、はっきり言えなかったが、友達の『強み』を見付けたり友達から『強み』を見付けてもらったりして、自分のことをもっと見つめ直してみるきっかけになった」「友達の良い一面が分かったり、自分が友達からどう思われているのかが分かったりして、いつもと別の視点からいろいろ考えることができた」「人からどう思われているのか気にはなってもなかなか聞くことがないので、良い機会をもらえて嬉しかった。自分が思っているのとみんなからの印象が一致していたので、よく見てくれているんだと嬉しかった」という記述が多く見られました。これらの記述から、生徒が持つ「強み」に着目した交流活動を通して、生徒が自分の「強み」を友達から伝えてもらうことは、自己評価が厳しかったり他者からの評価を気にしたりする高校生にとって「友達との関係を通じた自己肯定感」を高めるために有効であると考えられます。しかし、全体や項目別の数値に大きな変化が見られなかったことを踏まえると、「友達との関係を通じた自己肯定感」を生徒自身が自己評価することができる段階にまで高めていくためには、生徒が互いに自他の「強み」を伝え合う活動を継続的に繰り返し行うことが必要であると考えます。

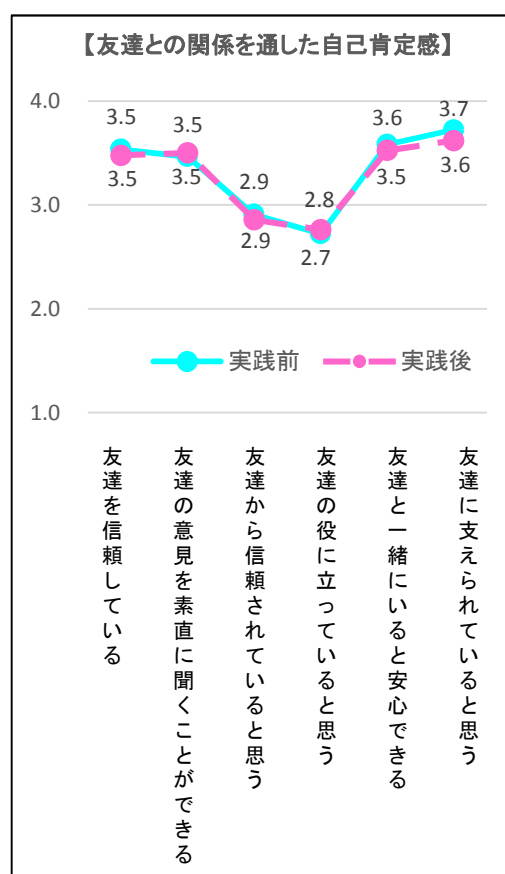


図4 生徒の「友達との関係を通じた自己肯定感」に関する意識と行動の変化 (項目別)

【検証の視点Ⅱ】

生徒が持つ「強み」に着目した交流活動が互いに自他のよさを認め合うことのできる人間関係を築くことにつながったか。

【検証の視点Ⅱ－A：学級の雰囲気】

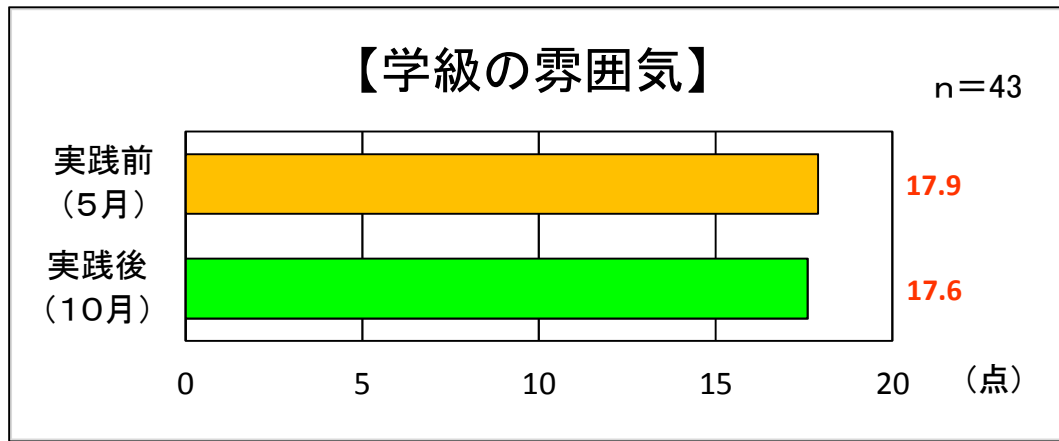


図5 生徒の「学級の雰囲気」に関する意識と行動の変化（全体）

○授業実践の前後で、全体では数値が 0.3 ポイント下がりましたが（図5）。項目別では、「ルールが守られ、みんなが気持ちよく過ごせている」で 0.2 ポイント下がりました（図6）。一方、「学級は明るく楽しい雰囲気」で 0.2 ポイント上がりました。また、生徒の振り返りシートには、「グループの人とたくさん話して、前よりもお互いの良いところや苦手なことなど新しく知ったことがたくさんあって良かったです」「友達と自分をグループ内で深め合っていく中で、みんなのことをもっとよく知りたいと思った」「これからも一緒に過ごしていく友達だから、今よりもっと相手の『強み』とか良いところ、個性を探していきたい」という記述が多く見られました。これらのことから、生徒が持つ「強み」に着目した交流活動を通して、グループの友達と交流を深めたことにより、友達への関心が高まり、「学級の雰囲気」が明るく楽しいと感じられるようになった反面、それまでよりも関わりが増えたことで、不快な感情を覚える場面も増えていることが考えられます。今後は、これまであまり関わりを持たなかった生徒同士が関わりを持ち始めたことで生じる「学級の雰囲気」の変化において、プラスの側面を更に高めながら、マイナスの側面を軌道修正していくためにも、生徒が互いに自他の「強み」を伝え合う活動を継続的に繰り返すことが必要であると考えます。

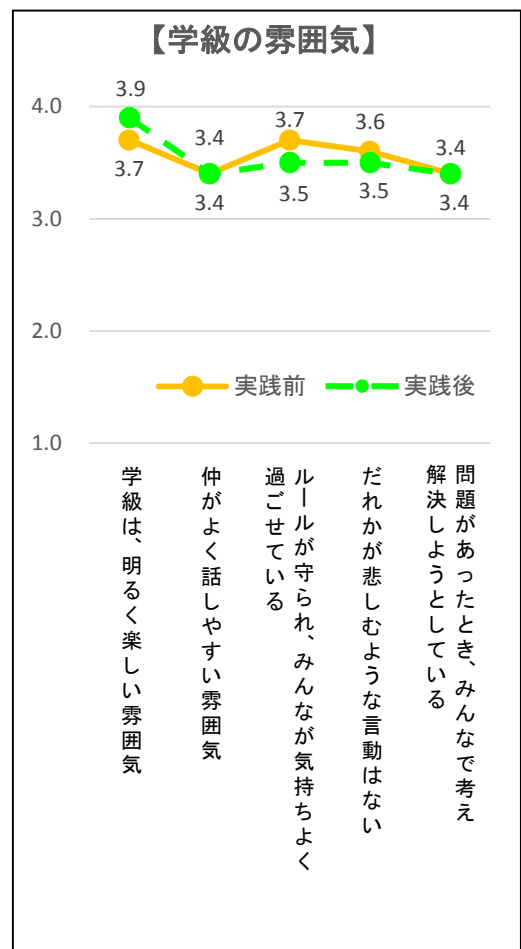


図6 生徒の「学級の雰囲気」に関する意識と行動の変化（項目別）

【検証の視点Ⅱ-B：友達との関係】

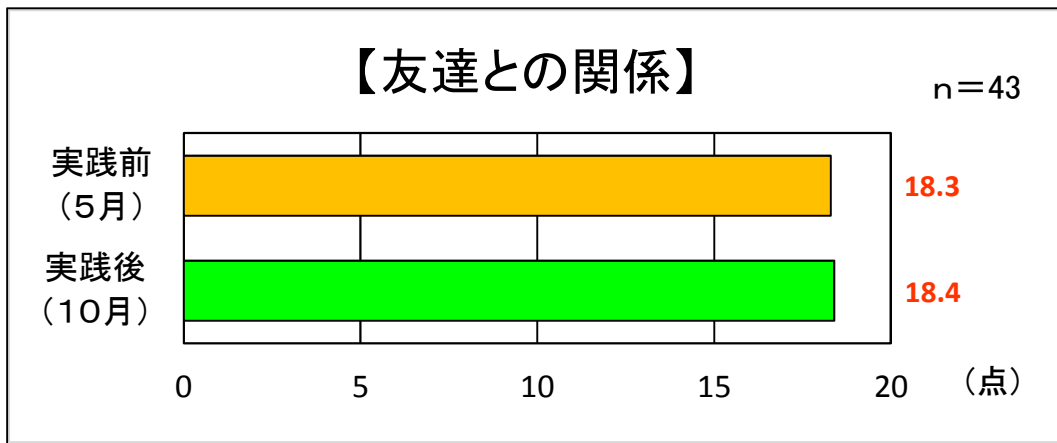


図7 生徒の「友達との関係」に関する意識と行動の変化（全体）

○授業実践の前後で、全体では数値が 0.1 ポイント上がりました（図7）。項目別では、数値に大きな変化は見られませんでした（図8）。しかし、生徒のワークシート等には、「友達のことをよく知ろうと考えたから、今はもっと仲良くなれるような気がする」「友達の『強み』は自然と書くことができ、一緒に生活する中で、意識しなくても友達の『強み』を感じていたんだなと思った」「友達が教えてくれた自分の『強み』は、自分より自分のことを分かってくれているものも多くて嬉しかったし、宝物になった」という記述が多く見られました。これらのことから、数値に大きな変化は見られなかったものの、生徒が持つ「強み」に着目した交流活動を通して、生徒が互いに自他の「強み」を伝え合ったことにより、今後、学級における「友達との関係」が良くなっていくことが期待できると考えます。

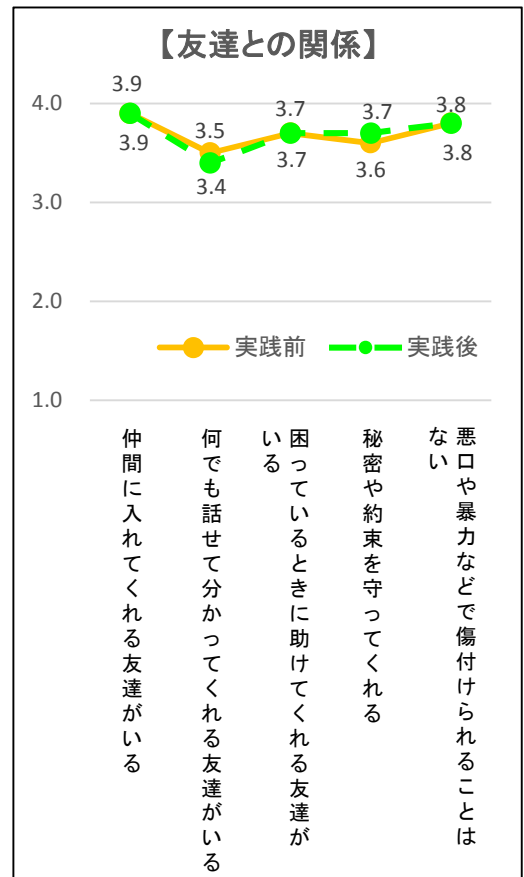


図8 生徒の「友達との関係」に関する意識と行動の変化（項目別）